三勝
半七

南柯夢 前篇

五

へ13
3909
5

へ13
3909
5

雲乃加里

二七全傳南柯夢巻之九

東都 曲亭馬琴 編次

羶後の病の上

羊七が宿かりし皆嵐の客店ハ。驛稍盡処にぞありける家なれど。昔ふのぶの生茂る。埋井の車とゝもに。朝夕水も乏しく。里も遠上久しくなりぬるを。細代天井ハ中窄く。雨漏よ煤を彩る壁の腰張悉剥く。長押より月をもらべく。高麗縁の席薦。ところ〳〵切疵て。藁を綯とも〳〵。故事もいふ人生の。竹縁ハ斜よ朽く。絃断〳〵琴よも似ず。されバこゝふ夜を明すかの。或ハ迴酒の後約者或ハ伊勢參宮の男の童。曜斎物うのをいふ。ハ。ことゝ笑ハそゝろ出〳〵炊〳〵。枕一ツを借りて燈火ぐらに置也。半〔半〕それの一隅の皐ゝり脱る泥声。ゝく。小曲ゝ嘉〳〵く謡ふあれバ笑の跡の

念佛をゆ〻しく称ふ。物あはれひすり題目宗あり。声の高ひ山里の老翁。
眼の光るハ浦曲の男ども。草鞋突ゐ
至。管笠油漬されど同形の面。汚ちりとゝの
去たる後ハ大風の微塵よ風するごく。
のの〻。笠笈のくもあるひハ。三
破襖ゐく。虫居のうゝを塞されが。
ふかゐる彼此入のうち結ゐ声を
ごく。世を視るゟも多り。
外よ。日を過し。物ゑ估竭しく。
山も空〳〵とゝく。ゐゐる恥を
ゐとゝく。三勝ハ一間を借て病たる夫を臥
惜むのうれが。近ひを知るうれも。彼此
も破並たれハ。そのうちそぐ貰ゝ
とゐひく。毎夜よ芝をふくし。
徘徊しくの門よ停立つゝろよあ
ゑ。米をゆゝく。その日〳〵をさぐ。
経くかくとゐゝりり。ま七ハ又三勝よ。
みられゐぶ身ゐゑ。とゐのもの。世の中
ゐる夜三勝が出ゐくを目送て嘆息しらてゐる。
家の近従よ召ゑ。君父の蔭といひうが
義のゐよ不忠とゐれ。不孝のゝとうし
ひ。世ハ暖うれども。眼よハ春色ハ

が賀を述べてよろこびしが又病鴈の妻なよ真愛をつくしてそ。
いつしか病着より苦くされさるを三勝が信く〳〵く。昼夜の看病に疲れ
心を悲びへなよ親なき三人が血の繋を三すぢの糸よ結あげ
味噌のまの内を受る扇をも名もそ夫のうしろ影に忍れ
松山の孤彼山に隆をし今の離節もとらの人ま馬耳東風かる時ふ
も藝の身代助るほどの薄命。大和よりく三勝を妻とうく迎を
産〳〵まで。乳母よ抱〳〵傳そ。假初の出居よも。商人ホよ舎そも思ふれ
悔〳〵とかりねどそれもなよ三勝よ
るを食をさつえつ存命とそ。ええこせよみるもひもの。白汗よてみせべ
りしよ。彼が心操をいろ〳〵ふまるさふ。ようや六年生延く。いろ〳〵数を
ちさ〳〵たり。貧の病よ身の病片輪車の足腰くをでろく悩よ。

懇小ろぶ身あれどそ。彼ホハ人よ寄がりれるくの人も憐そ。ろろ〳〵を
小給事とをるるもめろん。親いるくともまく音。歎く愚凝欲る
をろ紀の祝をもなくふ父いふうりめ園花も今ころの。徒一縁そ
締びん。りろ〳〵ろ恨むらんとともに
よのそ浮む欺もありねべ〳〵とろひとろよ覚期ろく。さそ翌の夜を行よ
ひとともろ〳〵三勝ハそ夜。五六合の米と二三十の銭よりく。二更の
比よ立つて。そ〳〵夫の妾否を向ぶ。
るどふ。小夜更るそ。ま七が腰を掻捺をり来
ま七の今宵限その名残そとろひし
三勝ハ夫の腰をるそえて。階するまを休めて物を引被ふ。
夫のほとりよ臥し。詰男とく起そ火を乞。粥こ煮そて。犬と枕

し。されい餘まり飲喰をして。終日看病をそのかしん辛艱難い。比んみりん
うるべし。かくて三箇日又霄の間小街より出く。物をこんとするかを
昼寝をされがま。常よりもきのやうあ
しうんゆるよ出ねく。とくする裕よ。初更の比及みも向とをおそりよとい
ねて。夫よりふたつの夜をいそぐ。ほうの炬をりよちんちりかれ。
今朝ようえて食もすこめらど。おをさく睡らねく。迷を暮らす便のう
べし。そ宵の出どもありのんと。
居自在うそ。内の透ねねうれが患とするよ足ろどおもをだともくち嫌こ
らくく睡らとべし毎夜のまうれが。避迫の出どもうの。とうこども。翌の
いくく便す。更ね間よとくゆえとそくなりぬくとのふ。三箇ほとさうだい
たとべし。枕方みる火桶よ。火もも活て。土銚よ湯もめるうくく行り厠へ登
んとく。強て身を起しまよう。ふ通よ指燭を乗し。坐行ふ出ぬくよ。祖父
の仲樽い半杓ふ行りふ。
噂よ笑えあれ。そて三味線を袖よ抱なく出んとするよ。おもろくまくられ
をうえとおれ仕地ふうのふ。ごはふ迎ぬくと。
高しふとうども。とうろうれが出も叱らどそうさをおくべろうどども。図の
御ふのどろしした豺出て。人を蠶とうのを実ふ。大人ふよ笛主殺して。多さ
その陪従をとべ。小麥の図ふを買てねさんえその三味線ふはも破れ後老尾
も絞くあり。は張更てるさんふ。
ろうばはを張うえさし。とくあそ来くふられや。急のそ来くんやめそ
く留をせうとしうく。夫のりふ注目い。尻切草履の習穿と足で
と走去ね。折しもれらの夜入合宿の旅客もふく。物こべの表出く

歌ふそ。まことホが次の間よりも。聲も既よならべ果る。處個のこゑは
聞れこの夜の長たよ。宵寢ちやうを一揮いふべんいと。とひちやうこれバおくの男ふたり
うち笑へバからら笑ひ。外面へ立出ル。おくの男ふたり。ゐて三絃いろわ夫子小引をつゐ。傳ふ
こうりうへ。あうど唱ふを一口よ「とぞやけ」と唄つゐ。ひろ街を徘徊と
拔すまふの後宝永年間或ハ元文ころある人の別莊。おくと双六とうちうつてゐるを又一とぞやけ
とうたふ。外より寒ん山里の。雨の音後ろ遊廓の樓いそがしくくるりとうろ。世のひと
く。外より寒ん山里の。雨の音後ろ遊廓の樓いそがしくくるりとうろ。世のひと
るとそ哀をとる。さる程よまた
小隣る信濃國。皆様ふうを
遺さでやと。墨斗よ筆の深ふ
んとひうちうるがふ。未記憶ふ。多賀莊ふく女の童ふ母が小曲を
教ふくの後よ。のちんめふひとこ
ふく。ふれ。ぐ吹ふりて逼ひーぐ。ふれ
ふよか。逼ふく。ふーふれ。ふ母が逼ふ
ふよ。逼ふく。ふーふれ。ふとひとふ
ども稚ふろよ。物ふくふりそふ
いいふく。と吹を掉をとうとふ
ふさそ。三味線ふくとも唄ふ。近ごろ流行赤ふふく。唄ひふとふそ
がふれ。それも久ふく唄ひ間ふ。ふ忘ふるとふもふべ。教ふと。愛ふふく。小腋
のほどバま七ふ。ふれでぐと母親が。忘れてふた。破扇を。逼ふべふを扨ふを

とう。声ちうあげて〳〵唄ひる。

○赤い物のこと〳〵

へそうそう〳〵。赤いものとそ。むつさんの万遍の出影堂。天満のうみのをと。赤つらの明王。天火いなつま朱すぼう。いのり夜の祇火。祇園夜の大ま。山王の鳥居。猿がこりのまい赤る。早川まる。のぬんど。もそうう。紅梅。ひさや。ひぢるをひぢりめんよひどんをと。七五どのひろ〳〵た。綿帽夜のさんちや。さんやうどの。ちちや。小野木夜のうそなるよ。おいの夜のいのまかけのうへ。朱ざや。朱具足。をのうち。猩〳〵緋。高雄のめそぐよ。さんの山の岩つじ。けーの死よひとそび。能不伸よざくろのそちりの木のさりめぶ。法ひいさりに。鱒のそみりえび。赤のひ赤がよ。赤うふりざこのめををちうにより。佛ざうのこちびる。か宗永の

みちさん。朱色のかのにぐよ。茶色のかのさへぶれうやとのづさんこうきのそ〳〵ぺよさ〳〵。朱さん朱りた。ちやつら。ぼろ。朱つば。朱りうめさ王のそのう。そのぜんじ。さそのそのさん中。あのやさん中。

と唄ひこられがまさん。ちぐともちちら笑て。長えをを忘れもどさそこそで唄ひる。それよそこの月をうた書かれのよとうん徳ちもり今久がかふく記く母が恋ぐべ。唄ひて誉られぬへ〳〵。麿呂の餅ばつべべ。と言ひ歩てく稚子へいぐ。真美よ餅ぬらべ。ぬらん。教へへといそぐ〳〵く。小膝すめつ今宵死ぬ。又の送言ふそこそこそこの良えさん。唱ふもロへぶこそこそこそこの調ふち乱上。涙えすくよ。拘ふかろ〳〵声細く。長く〳〵節。急る曲。只優よふうへ〳〵。陳ふ教生べの通へ〳〵写ひる〳〵。母さまよりぬくう。三味線弾く。

なよめごろいゆりあらざる。彼三味線の張ね欲り。斜よや
いと近ーと招こぶる。欠びよ睡を催ぢど父が女児をよ奇つくく託
忘るるよ。唄ぐ毋がりぐり。誉もちん歎ぢもちん。常ろ暮ろこ様
とふよ。今宵ハ二更よ移もめらじ未ろとよをとれど孟ろく
ぢ覚ーても無ちねろぶるの衾をつくぐ
ぢ膚の膝を枕よ睡頭。ぬび覚ーても恩愛よ。ふるるぬ心洩ふり。且し
とふれがりくべ壮士の勇ぢろもろ
隙うちうえ。噫ふれるぶらいひがひる。
絆されく。ふよぐ活ふる悔ーさよ。死ちりとはうび大私ある。園
が恨も散父の怒も解ねべー。とろとらへども。三勝が夫のおよこ食ー
嬪とちねぬ操ハ。比稀ふる員女のおぶ。家を失ひ今ー月ハ。
捨らぐ。夫婦一世の別とも。ふらぐ

画紛をえ忘ぢるび年長物の哀ぢをも。ふる祝悲ーくめらんぶろく
銃気もふくてちぢふり。毋よ孝ぢ盡ぢろー。五才の倅ぢが三つの術
小ふくく唱ふ歌も今。親の末期の役ふろ。ぢも過世の業因ふら
ぬへどくも教ふる。唱おをふ忘れそと寝頽を叙く暇乞。ふるぢと
脇をり親ふ餓ても渇ても。昔忘れぬ両刀ハ。父の像見の乱焼。乱れぬ武士
の魂と押戴ぢく抜くふら。襟ろうびく申刀ぢ。腹へ突立んとする折
ーも。向近くはふる足音よ。ぢハ三郎が帰ぢと刀をうくくぐ
らぐ。涙のるの障ふさと角くぐハ暗ふふくぐ。
呵くと笑ふ声を聞ば。甲夜よ歌ふー旅客ん。
らぬ障ふぐ。むいそーく。天とうのほを
泣虫と声よりれてや。三郎ハ喘くぐ走りつく倩とうんぐ。叫

死だ入り。夫の袴よ携著。さぐひる秋も酣り。ちくくと落る虫の
雛よる周章へ。ま七声を励ーく。怪我なちそ。其処放ちこゝ
ど三勝ハ。引留る一生懸命。縁故をはへそでい放ゝ携ゝ
も涙よ洗ふ氷の刃。反退んとそれどま七ハ。病疫をくゝよようちど。
ころ顔よ焦燥く。縁故をはんとるゝでお。ことそようてあれつが
あれ後よ向ゐへ。留るハ却恨くしとられるゞ。三勝ハその意を幻ぜか。ことが行
をろゝり行ゝんこハ物ゐや犯ひゐふとらをまセハはもゐへぜ。ゆよおを。甲夜の
唱おを忘ゐる。とられく女児ハ目を掛捗ひ。母さまろゝゐ答さゐふ。
書かたとゐゐ逼おをおゐゐて。ようく記行りゐる。三味線を弾てあられとわ
ちりかゐゐも。痴そくくさそハ答くの遺言をお足後小供へとて。女児小枝ハ
ころる欣夫の今。服よ三味線を。弾くそのよ遺言をはく母欣ハよ

もあらじ。理るたるをらぜとも。答くよ女たるすのくぐ。ろじゐゐ。
おゐ色ハ改をうち掉く。三味線るくてらをうーくゐは張らえん。宣ひ
たるふ。ぜどくくらのまゝりて来ゐひ。ぜまほーくハ弾ゐく。ろゝゐも療衣ふ小
餅をゐゐんと。回答ーて。死んとすゐ父。ぐゐる母のゐもろゐね良れさを。恨ゆ
くや次の間る。稽客が摸持。これも三をちのりとけるた。女児も耳を側をと
ハ三勝ハ賺ーうよく。ゆよおゐ色ハ。母ハらのまを放されお。外
うぐう彼撥音よ。おりーて答くの遺言を。ゆーゐくというよ。ハをばえ
つゝら点ハ母さゐハ法ゐのう。法ゐよ
ろてよを膝よゐへ。稚ハ声をもりゐばゐ
みをかる。ろまのく。四よ稽寝ーく。彼三味線よゐ匹つ。旅
名うゐよ。病て伏屋の里遠こ。何ろうろえの山鳥のくる啼こ更級ハ

田毎の月の新るゝぐ。うれべうる千隈川。濡さが袖とつまるも。
締ぬえまゝとて。契を隔つるが嶽るらが翌の畑と。
さゝと久米路の橋。統筋の湖氷るとも。只都井よなりるが東るみ
れ陽の東の間も。寐覚の床の寝浪よもそのちろりしおさるおゝ。
さろえゝと。そふぞりで勲よ。こをりち月の駒や食む。ろ紀世を
去る琴ノ科の。言の葉ともとゝ果並び三味線も。乙の撥をぞおさめる。三勝唱おをゆみのほ。
とろゝ果並び三味線も。乙の撥をぞおさめる。三勝唱おをゆみのほ。
悲〳〵る限るる。病そよ身を恨るく。ふんと思ひ定めふ。理ふ似て
理るくをゝよ残る妻やまのゝ。ひも精〳〵ぬへう。かゝらんとその親と
まよ。譬〳〵ことぢの一の緒が。断くらろよかるろろ慌忙ゆりしも夫の

必死を救てとくく。神の孚れぬひそん。殺しみだ。とう紀口境凍ても喩〳〵
ても。まセなえくそひくさゝぢ。ふむの中紋唱ろよくろ。ろりくとしるそ
ゆくそれる。其処退すくと。鳥煙ろ。
ろ紀稚まい。行ろともひそれまへれども。ろう悲〳〵さよくと泣彼方
四ろよ捕箭ろ。釈る三人煩悩の。覇よ羽の意馬心猿繋ろねた
る玉の緒も。今や断んとえゝとりる。浩処よ次の間より。墓の襖を
押開。やよ新ゝ。腎どの。と呼ろけつ。三味線川掲ろ点土の三階
それをえくろよ甲夜よ歌り。張客い並和辛三まりしふ。
けど。とぞろう。秘〳〵さと喜〳〵さよ。言語ろうろく。

覇振の宿の下

そのそれ平三いま七よ対ひゆく。恩来小ぶくろを。不審もおさんが豫ろ

女児が物ごとりうて。ゆもなびのやうわ。おのれが笠松辛三うり。右うりよ今番こゝの驛路をそこれよりるしく絃歌を賣。彼此の門よ立在ありまあり。笠りうが女児よ似とりそれとゝろひあぐうを面をゆくしたれどその声をゆくよう。ぐうくいに同ぞこうよ立ろりく露親ふよ果しくそれと。花ろぐしありしうどそづ川岸が送言の発弦ゆくさくるものをそろうめらしく操捋ど。五十よ多び老がよと。稚な孫が過小合に。漸立ふりのう愛らしく声を守さく。疾の種。悉びねくろ窮柱小。機の当度も定くどあとくと戻る糸巻よ音締も湿る憂ぶ。恩愛の楊うけく。川岸がしどの自害をひ此苗る。綱まらぐのの不骨者もの。洗そ此猿をしく。東の果をそぐ呻吟も。三條が往方をろくまほしさそろうぶも獣をあいしていうぐう塔を殺をぐ此とひいも果ぶつと空庭よ立を

棄ひとり。ずるく難よおそめる。三條よ遍よしつのか雲。傷よぶ六年のむ。

三條河原よる。川岸を人よ棄ひ去らられしとも脚辛足辛を殺しなる罪脱ずるもびて。その夜洛をも逃去よ四年あまりを奈良よそこもしく。高天神の茶店よる。領主の代ふうとのぼりて武士小割の龍を恵此。大佛のほとうよ到くこれを抜けぶ。やもうりぶ飯の中よ一包の金を埋く。

三條が身價と字しなり。その為体ひと怪しられば。縁故をろうぶりやろく。豫く三條よ由縁あうと守くる五條よいのうて赤根生六れりのゆを問うさとゝゝ里人答く。彼人ろその咒ま七といふの洛よありて三條とうぶう。竜を縫引逐電ろう罪みろうく。永く出仕を止く直執虫あのくとうり。ろうそ至ろくこれありくらく。三條を棄ひ去なるい。結髪の夫ま七ろそありしともろうされば方人七。徒と挑を喜ひ人を殺と大罪を犯せこそ悔

贈りしこそめでたけれ三勝を結髪の妻なんのうらみ
ありけん去ど夫君の悪名を雪めず直ちに刺殺しそれ又自殺し情慾のみ
ざる身を潔んものをと只管名を定んれど恨もなきその女児を虐るその罪いと深しさるに三勝が身價その親よりも亡父條右衛門宿
君気と後のちさへ相弟もなしが彼人言を食むべく件の金を投るべしよ
此身の我をやりそその命を喪ぼ難苦を厭わで三勝が往方を索めあぐむ
も稀なる大丈夫ぞ七がなが不孝よりも頼りなくも頴ち稱賛べきたり
しが三勝も又嘆賞をそ拝ぶべくもあらねども彼が粉骨の骸骨を賣て自の老楽をそらんとするからぞ忌嫌ある
なり常々只管夫婦が孤忠の烈しき日数同じく絡ぐとこの夫ともの妻
あり纔か一世の奇縁天の結る良縁ぞ加之孫女児が怜悧なる容止も
小似るかと愛ずる年かいくつぞ名か行とかいふ年か彩名かある色と
なれ行日来世ルがそなるまも祖父さまの在すとかひ
きにのそらごとくほうとかりそをも事さる由さる由中
して誉られのいとかけるを言の葉かえ二親の袖よも寄ぞあるべき三か月
を拇拭ひ膝よかる色を引載しつかる女児をうちのぐら死んとかりか親も親
恩愛の絆ぞや賢愚剛臆の差別なく猛き勇士もかくねるのを鬼く死
もするよれと恨むも親愁の卿言うまでもなくまた三年練られて終よそで果
しるどこの死るまもなれどそくちばく歎息しかりなるこのうえ
小更らけく宿のあるじが眠たる套房の方へ遠いれば件のそさたち
ぜそ三か膝よ睡れるかる色を三勝よ抱とじ胴巻の財布うりの奈
良うくうりる負價一包をとり出ぐく夫婦が閨よかへるごと三勝が

若節もあり。そこで今なよ。彼が身價百金ありぞれをろく。ま七どの醫療のそこよせが身の病着からの大熱もさらさら貧の病も又愈るんをほろくとひの一とひ渝一つぞれを遍ちがまた七次を左右よ掉。腸の好意のさえるうの五ぞも。その今ぞ。夫婦のみよ用ひがた。敬りまとるれが病愈ぞ後その缺なを綢延て。崔昏へ返をともも遅たりあらぞ。仍もの平三よううちりへくとりよ。三務も又さまくよ言絡を竭して。夫婦へ平三が主ホとりろともも遍留まるよ至る。そぶるも似茶品をも厭つぞ。それがふまよ療治せり。さる宿のあるじつりく納得さ。さそ次の日より。醫師よえせく。價貴きも殘あるをろく洋をるぐ。ま七が病着あこり果ぬ足舊のごく健よ二十日あまりを経る。ま七が病着あこり果ぬ足舊のごく健よるりしぐ三務いのふもさくく。平三ふく欲びく。ま七よのかのう。あしね藻君よ起んりおるのぐくい浪速へもれる。活葉をもちふべし給へ各一も遠りくぐ。それ又土地の人気をもれてぞるのをを便宜をぬぬぞ。そうりとて勧一ぐぞ。ま七これよもぐぐく。親る四人遂よ皆拠をたち

ぞさらに西を行くに浪速より到て長町と
よ備家してそこのりろともよ勝を
云ざうぐぞんらいの孝三の原来俳優のるよ熟く。髪髻を似ようころろをゆさりられう
ろひつそく。入髪というものを似りそ
これを鬻ぐよ。玳髪うもそれもの。玳
買人も多くりそのち三勝。又簪髪とりの假髪をユ如して。孝三と
ともこれを似る狂よそじめの入髪い。玳髻のそうれど。簪髻の髪の
落ちを掩うれば。魏宮よ蟬鬢を製そじめ。綠雲擾くようて暁髪を
梳るがごく。婦女子大よ玩重し。簪髻を似をたれなて。三勝まもを
綿子して長町の簪死とるん。よびよけ。されがそじめの笠をごろ。ろ
ろうの人いちくび隠簑屋と世をふのぶ。まもろろの外よ商人とうりわる

まあ住び又住うの。岸の姫松年預御達。假髪改めされよろの外よも。髪結眉掃
玉柳等ととうとを近く浪速津をのなあるけども皆粗よく。数日の療治
小三勝が負債を遣ひ減らくよ来ろくく。活業を改よも。本復済
雑費られ被二三十金よ及べるをのほ贖ふよそつむぐ。て。件の金を
舊の数よあり。厚倉二年を夫よ返さやとく。親よ夫婦られがろよ
りくそのをを盡し。夫い豚も活業よ懶らど。妻い又節倹を宗とく。
飲食も薄くまれど。もより細死痩世帯よく。二三十両の今を怨地
小貸逼ぞうもあくぐ。これのこうくぐ。また父ま六が妻ろろち
とうのれがをのひくぐよ奈良と立條のる俳を探周よまのい今うの後周こ
めくれく。いとうう老らぐら。をを見れ一トさび想思病ようち臥ーてうう
たえく首を撞ど。の七年が往。死もするど活もするどされぞ典借

髪結床
さんろ
おつう
髪結床
世よ
行末
笠松
髪至
と補を

夫婦ともにくまなを恨み女児をさまざまに諫らつくゆ
びろふれども縁〳〵を結ぢんとをもはれども園花いふ志を固〳〵
けりどの辺とも暮るもぞなげかるのみよひほそとやえん〳〵
の父もやゝ〳〵とびいろとびゝ懼る齢るよろれもえよ
そこるく久〳〵からためえぬふるのいと朽をゝうち歎ぬ園花ら
操も不便るへろひながら父を捨ひ彼女るを慰るよもあらど二務もこ
のるを笑く園花がみの中をゐりれも彼もうこ
らねりのをゝ夫婦奉命るく限速よありとゆるのぐさこを知〳〵
とゐひぬらめゝとび縁故をゆえもひく後ろ多ら尼よるのぐられと
ありの花をまてよ生に夫がたゑむうらどら帰らゝゆゝとゝ
あらふる神佛よ祈けるとゑ。

主ろを園の花

さても蛾松典膳が女児園花ハ往年まなが舞〳〵と奉りと笑えゝろ
姉〳〵とやふ氣をろく〳〵ゐ身の形ろを歎くのぐ〳〵望を失ひてにくぐ
とやふやうつぶ夫そ。人とろりそのゐざさよ負〳〵けゑべ。舞〳〵うのんどよこゝち
惑ひ患孝両ろう鉄のふやうふ彼舞〳〵ハ豫ろ〳〵ゆえもふし
のへる。稚馴染の結髪おさんとのとやうんあふざ歎。そうぐ彼人
存命ろく。落ふありろるふ環會。已ゑ祇ろどもふ延を圖〳〵ふ
ゆや。そんかくまれるのふ。深ゑ死こそあゝれとろく〳〵遠〳〵慮るはど
墓ろのハぐ羽ゆろく〳〵涙の雨よ枕も打拍り目解〳〵長廻〳〵
病ろとろびしう。針灸薬餌も験な〳〵父母いろれが為ふいぐぐ〳〵
胸を苦〳〵めさみぐよいい愈〳〵ゆ七がるのなろひ絶せんとろれば

却病をうんぬ。ぞ。ぐ。ぐ。ぐ

外うぐひすの安否をうかゝへ。扉むらそがもなれと。そが男の心操。言告やうん便もあらぐ。そくこの風声をうひ止のとうと胸ろ
そのおりも。果〳〵典膳も。はせがるやうろ。大なる怒り。密よむ浪よ
縁由を物かう。彼ろみ〳〵。年男の憤を散さんとのをもく〳〵を。婢。編
笑〳〵。聽く園苑よかく〳〵と告よ
そよ違ね。今ハ男のあ男を殺〳〵兄母を陳夫を殺ひく年男の滅ろ
そもろ〳〵ばるべ。そろうく〳〵と。そひ定めるれど。こまみあうさぐ。頃
志も年極の上旬。宵の霞も吹雫〳〵。保ゆく〳〵永る夜よ。園花宮鶯
ふ氣生〳〵。そと行燈を引あとる。腕も細ろ〳〵力ろく。寝乱〳〵ろく
髪の毛。顔よかろを掻あぐれば。呂のあやふくふとろ落る。俟よ墨よと
揃流と。嫁入のとの硯箱。夫の紋とうぶ紋を。蒔繪ちどもいろぐろ。

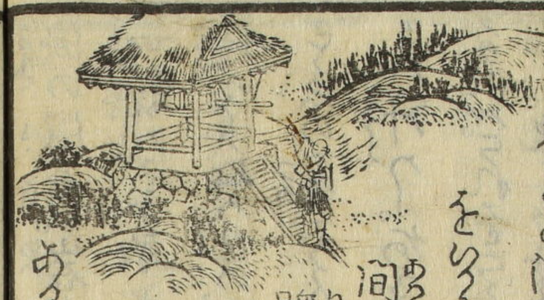
夏毛秋毛とろ筆の。命毛も今宵限ろ。もろ男ぬ父母の歎なも
さとそと推量らと翌ハろぶ身を暗よ細〳〵と書留めて
讀ぐち。かろ文ももぐたく〳〵。親を祝ぎまいろとろ。のしふく〳〵を
留巻納んとろふひものけど。のの行ろ窗窺さん。咳〳〵屏風
掻半り。内よ入るを見ど母親ろ。園苑打呀と驚ろ。忙〳〵遺書
を。袂の内おりとを氣。見ど母ハ見ぬ良そ。ほろちろ居ろ。
昨今ハ寒も殊さふよ母ゆろふ久〳〵病ろ。小夜ふけく
そろものへ流ろ水ふてろあ見ど。落ろ泡ころうと秋鬼〳〵年
七を。ろのとをく〳〵母が。安〳〵大和ふあろ神佛
願事もかけつ〳〵。額の細ろを見ろ毎ふ身の病ろ母苦
入ろ夜半の声。笑けばそふかく睡ら見ど。ふろふ今宵ハ常

憂若ふ
追て
園花尼よ
うんと
その花

う。人をもはゞ記せるふへ。近曾頻る風雅ある。ませがるのえもいはれべ。さんめりぬうと思ふ。園花の後さーくくくーくくくーくくく

を夢のごとや七年をうせごも。そ〻ゑう嫌ま〻。身を仆容〻と
恨速まご〻。ゆたく恨をいうべき狭。吹〻化う舞〻の隔世よ色香ん
花の。三拐どのと園花を。醉言〻いう〻深山木の。実のある果をかく〻とごゞふ。
笑えゐしき〻笑まうべ。恥の辱まく〻化うえん又理よ責らまく〻宮仮
初の捨言埃。のけらく〻ともて子さく〻ある。妹夫の中を門裂く。姫婦く
学よ疎ま。織目の合ぬ蜍。番。国房の晃風のさうも。うく〻連儀うひ
もあゝゞ。学ふも人ふ白捨らまく〻千。冬の扇の骨そう。病髄さあうゞ。
れうう倦まて彼而そゞ。ゆけと宮ふ情す。宮願〻そふ彼人よ。異と
そうもあうごく〻そ。のく百年も世よ栄吉野の花れ廊そう。文報の
るもおうふ。ゐひ生〻くゆうべ。ゐ月の後もいそう。喜〻く成仏ゞ
いくとべ〻。親よ先ごろ不孝の眼。ゆる〻ゆく〻と合と堂よ。隈筏る

涙の瀑布。岩よ堰〻ごく〻ゆく〻。これくもまよ逢人くふいいね操を
母親かゞ。ゆく〻。負女両夫よ見えごとにみいりく〻ど始終
惜うぬ世の中ろ。人ろうゆく〻あるものを。親も及ぬ心操を言の紫
とる名のうゞうあ。ひちうさねが彼人のそるうもうあ。母がゐ〻
うん汁ゝ。なうもちゐ〻ふ月が兄曽志郎ハ。ま七ゞ竹馬の友
れがこれをこそとそひく〻。けよ密ゆふ。月が年頃の物そひと母が
およ往を。審よ笑えゐしてゐ。相結られば。彼えうう恨速よ赴さく〻。
ま七が長町とゆうんの隠家をうゞ。時宜ようべ対面〻く〻。縁由を
述。その意をゆく〻。なう来べ〻とひそう。置去よ生うけても夫
婦の縁〻いうそゞ。塔が應をゆく〻後ろもうるゞ。
るゞそ。あうふ遠ま〻ゆふそひうるの果ぐうも彼ゞとく〻



まセを亜にめ。ふくや母ゞ憤をそゝ
又ハ刃ゞ操もらゞくまうふ。ゝるとなく
雨降そゞろ〳〵土間みとのくがゝくそゝ
らのまとゞ。園花いゝそゝち伎こゝ。こゝ
ると。浪速へ卦をのゝと欲そゝ
をりふせんのふせんとて伎仙む六の花も消ゑ〳〵今や七つの
間る。十三鐘とのろ。枕土圭も落なろ。いざ
睡るゝと母親がゝるまで亀こ。刃白冷る涙の氷ろゝゝ
臥簟の内ゝ秀りく。ゆやく自叙をゞめろゝる往
ゝ蛭松曽太郎ハ母妻浪がものび歩ふ。暗潭つゝこと
あゝとのく。俄頃ゝ浪速へ卦なく。ゆ七ゞ隠家をこゝそ

為体を窺く。時宜ふゝゞ面あゝ
ふ。ゝえ来孝ゑふゝ仁壮伎ゝれゞふゞ刃ゞ
仕せざるゝゞ。同僚们ゝゝのこゝ
次の日俄頃ゝ刃装を整ゝふ。冬の日の短くそ。や申下刻ゝゝり
けとゞゑ忙〳〵ゞ役者ゞ一人をねく。漫ゝ立牛が路一里ゞりゆくふ。
日も暮ゝんとゝ。あゝうふ急ゞく。矮伐をゝりゝろ。刷ゝるふいゝ便
ほとそ。従者をゞ其ゝうゝ去うなしし尻が辻ゝ到ゝゝれをねゝ既ゝ初更
の比ゝゝのまゞ。そのゝのゝりゝざりゝゞあゝ
闇顛を跳くり。そのゝゝ二人の橋夫ハ棒ゝる樹の下ゝ橋ゝゝ
つ。あゝとりふゝゝうゝと難伐ゝる顛を銭ゝるふ。ゝ重ゝ常ゝ
ぬゝゞ郎骨を痛めん。役も我も脚気發くく。今ハ一ゝも運動ゞ

定めの建場そへ今こゝゝ暇をもらひべしといふ曽太郎
これをやく〳〵訳ゆうち戴こうもうせ橋うち出病病とあはべせんとべ定
のあやまぐ〳〵へる迷うんど足ハ数のごく〳〵そうとうとしつ腰うち可
遣の財布を解く殘三番を遣らんとするふ橋夫ハ手ふもうで冷笑ひ
こいうふそひさべのふ〳〵ろうの駄賃をもらうんとてすぐへ乗せ定の
外うる酒貰ひさゝゝこ脚氣さ發じのふ〳〵ぜの價をもるべいとふつた
うこと咳ふぞ曽太郎又一番の殘を倍くさ出をを一人の橋夫搔取そ。
礙と投うゝゝ眼を睜声をうり立百二百の半殘ふく人の命を買るの
うへとハ我を欺くみとそこのをうべ殘る一人もすこ多のうのへ千遠し洛狼
も衣服も脱ぐ遁らせそじゝゆ〳〵富一〳〵
競ひ蒐ふべ曽太郎忽地大ふ怒う。さくハ汝未賊るよ孤客と多ひ蔑う可

惜首をる喪ひそことあざ笑う目前へ刈ふを息杖を左とあへ
入猪一。直ふ撲地と打落せべとふ。打惜とくうろもふ。廻著を排除頂
髪迸く雄ふ雌ふへ撞と投ふべ岸破と起。倭僮ふべ前後うう。狙ん
とするを高せも著ぞ。受を拒〳〵丁と蹴倒一。ふ首背へ掉胴一。橋の
ほうへ押著つ結下うる挑灯の火光みく。そべやくその面を見ふべ
ふの轎夫へ別人よめべ。往ふ南都を追放ふる。今市全八郎。布施蝶
九郎うりしうべ。曽太郎まうく怪うく。羞をうざる愚物ふる蛾松曽太
郎を見ふそうや。とひつ訊巾を掻脱ふべ全八蠑九郎ふの人
うるを認く大ふ驚を。そひうけぞ。慌忙逃んとするを紀一もふぞ
ふとう投く刀の脊打。肩腰の嬶ひうく。折とえうく。倩とふうへふ
頼の党賊かうる景迹みくありうべふ。可不忠不義の天罰うるべふ。

布袋蝶九郎

あり松豆太郎
今市金八郎

却悪心増長しく。旅客を引剥せんとのその罪祟ーがさーこのごとし。
階の旅寝するこそ。奈良へ帰りゆくことをやどぞ。云々ー首を継そうろう。
ても羨どやうの母悔ーうどやうの
九郎苦痛も堪ぞ。呉ゆーもへ。許ーなくと叫びうり。そのこえそこ
刀をおさえん。腰も著るる小挑灯の灯をうんーー。
逐ふ浪速をさーうーのそだ去ーうーうく。更闌られバその夜ハ平岡ふ
宿りて。彼役者を結ふ。次の日従者へ深江ふく追著けるとぞ。さる
祖ふ全八。蝶九郎ハやうやくおーふ刃を起ーく。まづ自脈を珍。手まさぐ
ころくーる唾を塗ーく拭捺るどー。直と呆ーく。目をえあーつ。蝶九
郎ぐらいのやう。今夜稀なる孤客を案ーられバそこそこいる
ふ。幸ーるとこそあれ。眼も眩ーく。

尼が仕わざ足を定るとそ。汝も昔も序うろひうけぞ可
惜肩を費ー。剰うらめを
め。七情ハ起とのべらそもあり
かさうろ。うとのべばふらそを
ハ。彼三狗を妻ーう。浪速の長町みありとぞ。
密ふ這奴を結果。三狗を奪ひ去。遠く東の果のどく賣遣さバ今夜
の損ハ補ふべー。さんあらぬうとのみを。
金の蔓ふ堀當う。ふんあ
法人うふふ狗具られバ。俄くふく
山下ハやメくー人もあらねバ。
潭ーつ。逐ふ空橋を打記しう

雲乃加 西福城 毋里

金八蝶九郎八七年以前ふ奈良を追放ふうう。拐津門内の
間を徘徊し。到るとろ悪友とのミ交参うう〜ぬ不為をのミせし
祖ふ里人ホふ憎ミ。のく使うう〜うりぐ二人のろうもふ旅轎を舁
く。生活よそろれど。恥をろくざれが義るそろのく。動まろバ旅客ま
ろく非法の残を貪ろく〜人と計較ぬ固ホ見憎てものに憎
ろ。癖者ろう。

三七金傳南柯夢 巻之下

鳥居蔵書